

五城目町のほこり

すばらしい先輩たち

2

五城目町教育委員会



目 次



四ツ車 大 八

—— けんかのヒーロー



泉 谷 力 治

—— 寺子屋の先生から
最初の小学校の先生に



北 嶋 南 五

—— 俳句をひろめる



館 岡 栗 山

—— 郷土の風景や行事を絵に



近 藤 泰 助

—— 湖東病院の生みの親



四ツ車 大八

けんかのヒーロー

秋田は、むかしから相撲^{すもう}王国といわれるほど、強い力士やうまい力士がたくさん出ています。そのなかで、江戸時代の有名な力士としては、四ツ車大八を一番にあげなければなりません。

造り酒屋で働く

のちに四ツ車になる荒川永蔵は、安永元年(1772)五十目村下夕町(今の五城目町字下夕町)に生まれました。

父の九左衛門は、あめつくりが仕事でした。働き者の母は、村の造り酒屋彦兵衛酒屋で台所の仕事をしていました。永蔵は、母につれられて毎日酒屋に行き、一日じゃまにならないようにして遊んでいました。

大きくなると、永蔵は帳場ちやうばをのぞくようになりまし。帳場というのは、番頭たちが取り引きのことを、帳簿ちやうぼに書き込んだり、そろばんで計算したりする事務室のことです。

毎日のように帳場の仕事を見に来るので、「おまえは、文字を書くのが好きだよだな。どうだ、いろはを教えてやろうか。」

と、番頭がいうのに、永蔵は「うん。」とうなずきました。そこで、番頭は紙と筆を与え、「いろは」と「一二三」の手本を書িয়েくれました。

そうしたことがきっかけとなって、永蔵の手習いとそろばんの勉強がはじまったのです。

永蔵は、たいへん利発な子どもでしたから、12・3歳ころには、寺子屋に通っている同じ年の村の子どもたちに負けないうらい、「読み・書き・そろばん」ができるようになっていました。

体も、人並みはずれて大きく育って、酒屋若勢わかぜの仕事を手伝うこともしばしばで、みんなによろこばれました。



彦兵衛酒屋

15歳になって、永蔵は若勢のひとりとして彦兵衛酒屋で働くようになりました。背たけが170センチをこすほど大きくなり、永蔵は力の強い若者として、村の中で目立つようになっていました。

草相撲

五十目村のあたりでは、相撲がさかんでした。

月に6度の「市」が立つ五十目は、この地方の中心になる村で、神社やお寺の奉納相撲が、年になん度もありました。奉納相撲には、村むらから技自慢、力自慢の若者たちがたくさん集まります。若者たちの熱戦を見ようと、村むらの人びとがやって来て、村は大へんなにぎわいでした。

酒屋若勢の中には、力自慢の男が多く、村の草相撲の人気力士がいます。ですから、ひまがあると酒蔵の間につくった土俵に、仲間同士が集まって相撲のけいこをするのです。

「おい、立って見ているのはだめだ。いっちょう、もんでやろう。」

体の大きな永蔵は、いやだといっても、いちばんとしが若かったから、引っぱり出されてそまつな土俵にあがらなければなりませんでした。ところが、けいこをつけてやろうといった男が、ぎゃくに永蔵に土をつけられるありさまでした。

「体が大きいから、力が強いとは思っていたが、相撲の形をおぼえているぞ。」

と、負けた相手がおどろいてしまいました。

若勢連中にすすめられて、永蔵は草相撲の土俵にあがるようになりました。まだ若い相撲取りのめざましい活躍ぶりに、村人から「酒屋の永蔵」と呼ばれる人気者になりました。

花形力士になった永蔵に、ひとつだけ残念でならないことがありました。はじめて土俵にのぼってから2年たっても、桶屋四郎左衛門にはどうしても勝てないことです。

村の桶屋の職人をしていたので、そういう名前と呼ばれていた四郎左衛門は、永蔵と同じくらいの体格でした。としは永蔵よりずっと上で、力の強さは村いちばんといわれていました。相撲の技も、勝負のかけひ

きも上手でした。

負けずぎらいの永蔵は、くやしくてなりません。四郎左衛門に勝つには、けいこを人一倍するしかないと、仕事がおわってから若勢仲間だけでなく、村の若者たちとも、はげしいけいこを重ねましたが、なかなか勝てませんでした。

そうしたのが手の桶屋四郎左衛門にも、やがて永蔵は勝つようになりました。

どうして、勝てるようになったのか。いくつかのいい伝えがあります。

伝 説 その1

ある夏の夜、永蔵は網^{あみ}をかかえてひとりで川へ出かけました。

漁につかれた永蔵は、川原の小屋で休んでいるうちに、つい眠ってしまいました。そこへ、ひとりの女の人があられ、まどろんでいる永蔵をゆすったのです。目を開けた永蔵の前に、赤子を抱いた女の人が立っていて、夜はすっかりふけていました。

「こんな夜ふけに、赤んぼうを抱いてせまい橋を渡るのは、あぶなくて困ってしまいました。用事をすまして帰って来るまで、子どもをあずかってくれないでしょうか。」

と、女の人がたのみました。女の方は、りっぱなようすで、ただの人とは見えませんでした。永蔵は、

「それは困るでしょう。私がしばらくの間あずかってあげよう。」

と、たのみを心よく引き受けました。

眠っている赤子を腕^{うで}に抱いて、永蔵は橋のたもとに立って女の帰りを待ちました。ところがどうしたことでしょう。腕の中の赤子は、だんだん重くなって来ました。力には自信のある永蔵は、不思議なことだと思いつつも、一生けん命に石のように重さが加わる赤子を、しっかりと抱きつづけました。

赤子は、いっそう重くなるばかりです。油あせが、全身に吹き出て来ましたが、永蔵はそれでも約束した通り、抱きつづけました。最後は、山のような岩でもかかえたように重くなり、骨がくだけそうになりまし

た。永蔵は目がくらんで、「もう、だめだ。」と思ったとき、突然、腕の中から赤子の姿が、消えてしまったのです。

ふとわれにかえると、東の空がしらんで来ていました。村からはにわとりの鳴く声も聞こえて来ます。

家に帰ろうと網を持ったところ、重いはずの網が、永蔵には紙のように軽く感じられました。

それからというもの、永蔵の体にめきめきと肉がつき、自分でもおどろくほどの怪力が出るようになりました。そして、秋田領内では並ぶ者のない相撲取りになりました。

その後、永蔵は江戸に出て、柏戸関に入門しました。

伝 説 その2

桶屋四郎左衛門に勝てないのは、「自分の力がまだ足りないからだ、今よりもっと力持ちになりたいものだ。」と、永蔵は考えるようになりました。

そこで、彦兵衛酒屋のとなりにある、酒屋の氏神のお不動さまに、永蔵は願がんをかけました。永蔵は、朝夕お不動さまにおまいりして、

「もっともっと、強い力をわたしにさずけてください。だれにも負けない相撲取りにしてください。」

と、熱心にお願がんいしました。

その願がんいがお不動さまに通じて、それから永蔵は大へんな剛ごうりき力になり、



紀久栄町にある不動尊社

だれにも負けない強い相撲取りになったといえます。

この伝説には、お不動さまは坊が沢の不動滝のお不動さまだという、別のお話があります。坊が沢には、江戸の相撲取りになった永蔵が、寄進した鳥居のあとという碑ひが立っています。

伝説 その3

永蔵は、より強い力を神様からさずけてもらおうと思い、阿仁あにの萱草かやくさ七面山にこもりました。

阿仁は深い山の中の地域ですが、萱草はその中でも山奥で、七面山はさらに山また山の、ずっと奥にあります。その深いふかい山奥に七面社れいげんがあって、靈験やしろあらたかだという評判でした。願いをかなえてもらいたい人びとは、この社やしろになん日もおこもりをして、滝にうたれてはお祈りをするのです。永蔵は、七面社におこもりをして、人にまさる力を神様からさずかりました。

このお話にも、別のお話があります。永蔵は、自分の村にいて相撲の腕をみがこうとしても限りがあると考え、大きな鉾山があって、全国から荒くれ男が集まる阿仁に行って強くなった、というお話です。

阿仁の鉾山で働いて帰ってきた永蔵を、だれもうち負かすことができませんでした。村人たちは、萱草七面山におこもりして、力がさずかったそうだ、とうわさをしたということです。

江戸大相撲

永蔵は、村の草相撲では負け知らずでした。桶屋四郎左衛門も、いまは敵ではありません。

そんな永蔵が、巡業にやって来た江戸の大相撲の親方の目にとまらなはいはずはありません。

いなかの草相撲で、無敵だといわれるのに満足する気のなかった永蔵は、

「どうだ。わしの部屋でやってみないか。」

と、親方にいわれると、目をかがやかして「はい」といわないではいられませんでした。

18歳の永蔵は、柏戸宗五郎かしわどの弟子になって、一心にけいこにはげみました。

めきめきうでが上がった永蔵は、親方から二代目の四ツ車の四股名しこなをもらいました。永蔵は四ツ車大八と名乗ることになりました。

初代の四ツ車大八は、久保田（今の秋田市）の出身といわれています。相撲わざの技にすぐれ、20年間も幕内の関取りをつとめ、3度も小結になっています。ですから、四ツ車の名は大へんめいよ名誉のある四股名です。そのような四股名をもらったところをみると、親方の永蔵への期待がどんなに大きかったかがわかります。

場所の成績もよく、弟子入りして1年ほどの寛政元年（1789）の番付けでは、幕下の中ほどのところに名前があります。文化6年（1809）には前頭の東四枚目でした。次の場所は、あの有名な雷電らいでんに勝って前頭東三枚目にすすみました。これが、四ツ車の最高位でした。四ツ車の名前が全国にとどろき、今も相撲ファンに知られるようになった、大事件がありました。

けんかのヒーロー

そのころ有名な力士といえば、谷風、小野川、雷電です。ものすごく強かったそうです。ところが、四ツ車もこの力士たちに負けないほど有名な力士だといわれています。

強さという点では、おとるところがあるかも知れません。なにしろ、前頭の筆頭ひつとうにもなれず、三枚目が最も上にのぼった番付の位置でしたから。その四ツ車が、雷電たちと同じほど名前が知られるようになったのは、「め組のけんか」のヒーローだったからです。

むかしは、国技館のような大きな建物はありませんでした。「場所」は、江戸の大きな神社やお寺の境内けいだいを囲って、晴れの日だけ10日間とか12日間とかというようにこうぎょう興行しました。文化2年（1805）の春場所は、今でいうと東京タワーに近い芝しば神明社の境内で大相撲興業をして

いました。

事件がおきたのは、その7日目、3月4日のことです。

芝神明のあたりの町火消し、浜松町の辰五郎^{たつごろう}と宇田川町の長次郎が、木戸銭（入場料）をはらわずに、見物に入ろうとしてさわぎになっていました。



歌舞伎になった「め組のけんか」

そこへ、四ツ車と同じ部屋の幕下力士九竜山が通りかかり、止めようとしてしました。しかし、いうことをきかなかったので、ふたりを外へつまみ出したのでした。

問題は、それでおわったはずでしたが、あとで同じ境内にかかっていた芝居見物に出かけた九竜山と兄弟力士の藤ノ戸を、辰五郎、長次郎たち「め組」の火消しの者たちが見つけ、さんざんになぐったり、けったりしました。

急を聞いた四ツ車は、九竜山、藤ノ戸を助け出そうと、芝神明へかけつけました。そして、元気がよくて乱ぼうだという、たくさんの火消しの中にとびこみ、ふたりを助け出しました。

さすがに、幕内の関取りだけあって、むらがる火消したちをあい手に、大活躍です。三間ばしごをふるって、かかってくる火消したちを、しょうぎだおしにするありさまでした。けんかがとくいと自慢していた火消したちも、四ツ車には歯が立ちませんでした。

この「め組のけんか」とよばれた事件は、寺社奉行と北町奉行のおさばきをうけました。有罪とされた町火消しとは違い、四ツ車は「おかまいなし」になりました。

よろこんだのは、江戸の町の人びとです。日ごろから、火事から町を守ってやるのだといばりちらして、らんぼうの多い町火消しのふるまいにみんないやな思いをしていましたから、こらしめてくれた四ツ車は、けんかのヒーローとして江戸っ子の人気者になりました。

この春場所は、四ツ車が前頭東4枚目にすすんだ時でしたので、特にはりきっていたのかも知れません。

「め組のけんか」は、「神明恵和合取組」^{かみのめぐみわごうのとりくみ}という歌舞伎芝居^{かぶき}になったり、浄るり^{じょう}という語り物になったり、講釈師^{こうしゃくし}によって寄席^{よせ}で語られたりしました。また、四ツ車の顔や姿が、今のブロマイドのような錦絵^{にしきえ}にされて、売られたりしました。

四ツ車大八が、どんなに人気の高い関取だったか、どんなに有名だったかがわかります。



鳥居の跡

坊が沢の不動滝へ上る道の中に、四ツ車が寄進した鳥居があったところという、碑^ひが立っています。

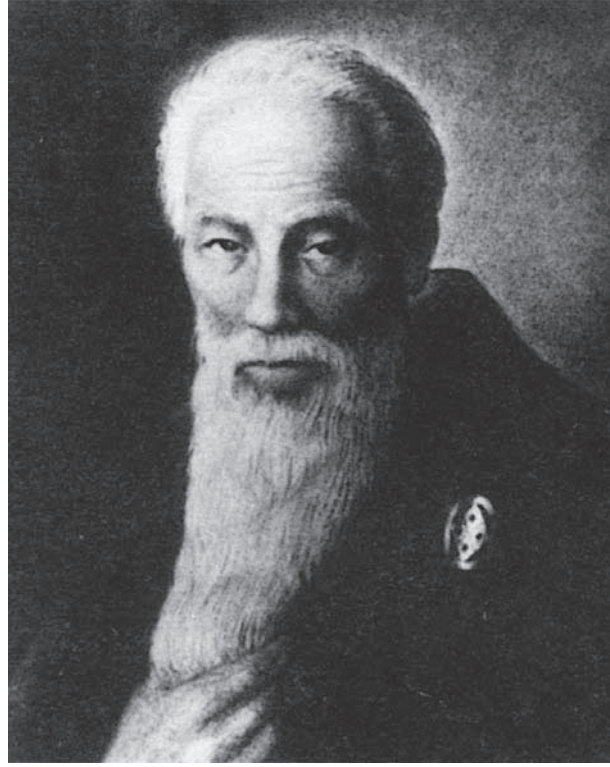
村の草相撲の土俵に上がっていたころ、力をさずけてくださいとお不動さまに願をかけ、その願いをかなえてもらったお礼に、鳥居を建てた場所です。江戸大相撲の関取りになった時、寄進したといわれています。

文化6年2月、茅場町薬師^{かやばちよう}の境内の春場所に、四ツ車は全休しました。そののちの番付には、四ツ車大八の名前は見えません。^{いんたい}引退したと思われる。この年に、亡くなったともいわれています。

町の酒造会社は、そのむかし四ツ車大八が働いていた酒屋です。この会社では、前に清酒「四ツ車」を出していました。今は、しょうちゅう「大八」を売り出しています。



坊が沢の碑



泉谷力治

寺子屋の先生から 最初の小学校の先生に

森嶽学校

明治5年（1872）8月、政府は「すべての国民は学校で教育を受けなければならない」というきまりを出しました。これを「がくせいはいっぷ学制発布」といいます。

学制発布によって、子どもたちが学校で受けなければならない教育を、義務教育といっています。今は、小学校の6年間と中学校の3年間の9年間が、これに当たります。

五十目村（今の五城目町本町）では、学制発布から2年後の明治7年5月に学校をはじめました。学校の名前は森嶽学校しんがくといっています。「森嶽」というのは、森山という意味です。今の五城目小学校のはじまりです。



森嶽学校の校印

このあと、8年に馬場目村のくんとう薫陶学校、内川村の湯又学校、9年に富津内村のかんざん環山学校・登美多学校・鶴湯学校つるのゆ、馬川村の高崎学校、大川村の大川学校、10年には馬場目村の中村学校がつけられました。

このあたりの村むらで、一番早いのが森嶽学校でしたが、最初は小池町の松浦三郎兵衛の家の、それまで開いていた寺子屋を学校にしました。その次の年には、古川町に学校がうつりました。そこは、泉谷力治が寺子屋を開いていたところで、それまでよりも広い校舎になりました。

しかし、ここも手ぜまになったので、10年（1877）には紀久栄町に新しく校舎を建ててうつりました。村の名前がついた五十目小学校に校名が変わったのは、明治15年でした。

五城目小学校だけでなく、他の小学校のはじまりも同じようなありさまで、お寺や神社、ごうぐら郷倉、村の大きな家などを使って、学校をはじめています。ですから、義務教育の最初の学校は、江戸時代からつづいていた寺子屋と、そんなに変わらないものでした。

泉谷寺子屋「愛顧堂」^{あいこどう}

五城目小学校が、はじまりのころ2年ほど校舎にした泉谷カ治の寺子屋は、五十目村と近くの村むらでは、最も大きな寺子屋でした。名前を愛顧堂^{あいこどう}とよんでいました。また、森嶽塾^{しんがく}、白水塾ともよんでいました。「白水」というのは泉谷の「泉」を上下に分解したものです。

森嶽学校の名前は、カ治の意見によって決められたといわれています。そして、カ治は森嶽学校最初の先生のひとりになっています。

それまでカ治は、木材業を手広くいとなんでいる父泉谷庄八の家の一部をしきって、寺子屋を開き、子どもたちに教えていました。学制発布の時に、カ治は寺子屋を止めましたが、新しくできる学校の先生になりたいと思っていました。

そのころ、五十目村にはカ治の愛顧堂と松浦三郎兵衛のほか、荒川六郎兵衛、仙北屋、小笠原、近江屋の町の家や朱巖院^{しゅごいん}、了賢寺^{りょうけん}、宗延寺^{そうえん}のお寺で寺子屋を開いていたといわれています。このほかに、西野村の広幡政弥^{ひろはた}、下山内村の朝野^{あさの}堅磐^{たていわ}、馬場目村の大森文八、中津又村の高泉清、浦横町村の小野太郎兵衛、野田村の加藤寛昭^{ひろあき}が寺子屋を開いて、村の子どもたちに教えていました。

寺子屋では、読書・習字・算術をおもに教えました。これを人びとは「読み・書き・そろばん」といっていました。



愛顧堂があった場所（新町と古川町の境）

幼いころ

泉谷カ治は、天保^{てんぼう}5年（1834）9月5日、庄八の長男として生まれました。カ治の生まれた前の年は「天保^{みどし}巳年のケカジ」と呼び名がつけられた、それまで例がないほどの大ききんでした。

そのため、悪い病気がはやったり、くらしに困った人びとが金持ちの家を打ちこわしたりすることが藩内の村むらにおこるなど、不安な世の中になっていました。泉谷家は、村でも指おりの物持ちといわれていましたから、生まれたときからカ治は大事に育てられました。

特に、8人の兄弟のなかで、カ治はただひとりの男の子どもだったので、あとつぎの子どもとして両親の愛を一身に集めました。

幼いカ治が、学問好きなのに最初に気づいたのは、父の庄八でした。文字も読めないカ治が、毎日のように朝のうちから父の部屋にやって来ては、漢字だらけの本をひろげるのです。

「おまえ、こんなにむずかしい本を読んでいるのか。」

と、父がたずねると、カ治はこっくりとうなずきます。

「おもしろいか。」

「おもしろい。」

おうむ返しにこたえるカ治の、つぶらなひとみが、きらきらひかっています。父は、もしかしたらこの子は学者になるかも知れない、と思いました。

学問にはげむ

やがて、村の寺子屋に通うようになりましたが、「読み・書き・そろばん」という勉強は、カ治にとってはたかが知れています。

父のもっている本を読んでは、いろいろ質問するようになりました。ふにおちないところがあれば、用事で家へやって来る藩^{はん}の役人にたずねて、教えてもらうこともしばしばでした。

14歳のとき、父は近くの漢学の先生へ通わせます。カ治は漢学に親しみ、特に伊藤^{じんさい}仁斎（江戸時代初期^{じゅしや}の儒者で京都の人。1627-1705）

の『論語古義』『孟子古義』『童子問』を、よく読んでいました。また、『中庸』(かたよらない徳と、その道を説いた、中国の儒教の書。四書のひとつ)もよく勉強していました。

儒教(漢学の中の孔子の教えで、四書などを学ぶ)という深い学問の世界に入りこんだカ治は、江戸で学びたいと思うようになり、安政5年(1854)20歳のとき親しい藩の武士が江戸に上るのについて行くことにしました。最後まで反対した父も、カ治の熱意に負けて、

「1年で帰って来ると約束をしたら、江戸へ行ってよい。」

と、ゆるすしかありませんでした。

しかし、学問の奥まできわめようと決心しているカ治が、父との約束を守るはずはありません。4年、5年と江戸での生活が長くなってしまいました。6年目になると、家からの仕送りがとどかなくなりました。生活が苦しくなったカ治は、北町奉行所にやとわれて、学問をつづけました。

学費を止めても、帰郷しないあとつぎ息子のカ治を、文久元年(1861)夏、父は江戸まで迎えに行きました。54歳の父と27歳のカ治は、いっしょに旅をして帰って来ました。

なつかしい森山が、少しも変わらずに迎えてくれたのに、カ治はほととしました。そして、ふるさとのために自分の学んだものを生かそうと思いました。

寺子屋を開く

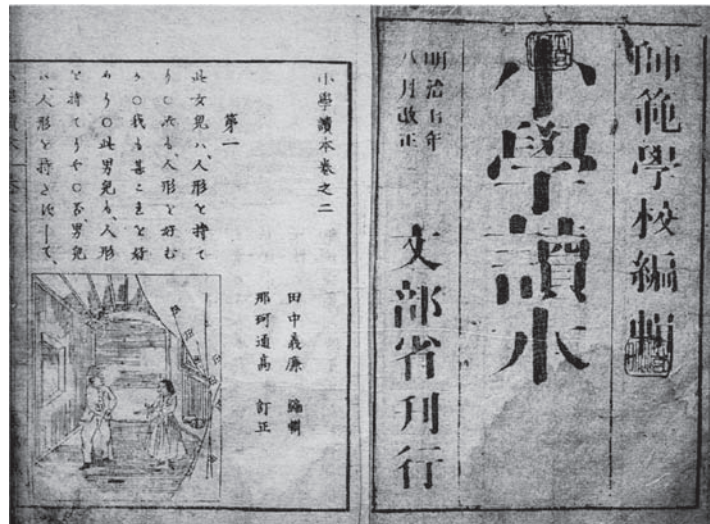
ふるさとで自分の学問を生かすには、地域の子どもたちに教えることしかありません。カ治は、家の半分を仕切り、文久2年寺子屋を開きます。家業をつがせるのをあきらめた父が、カ治の願いを聞いてくれたからでした。

この年、カ治は村の医者落合貞玄の長女ミナと結婚しました。

カ治の寺子屋愛顧堂では、普通どこの寺子屋でも教えているように、習字では「いろは」・口上書・手紙文など、読書では『童子教』『今川状』『実語教』や『商売往来』『百姓往来』などの往来ものから、さらに『十八

史略』にすすむ。特に読書では、普通コース以上の者には、四書（大学・中庸・論語・孟子の中国の儒学の本）の読み方にすすみ、力治はていねいにその意味など、内容について講義しました。

ですから、江戸で学問を修めて帰った力治の寺子屋



はじめのころの小学校の国語教科書

だというので、日ましに人びとの話題になりました。村の子どもばかりでなく、近くの村むらから通って来る者も多くなりました。村一番の寺子屋と呼ばれるようになりました。

ある時、論語の大事な一節を読み取れない弟子のために、いっしょにくり返しくり返し読み、昼食も食べませんでした。ようやく力治が満足ゆくように弟子が読めるようになったのは、もう夕方でした。その時、妻のミナも昼食をとりませんでした。それほど、力治は教育に熱心でした。

手伝い教員

学制発布によって、新しい時代の教育を感じとった力治は、寺子屋を止めて森嶽学校の先生になりました。五城目の人で、五城目にできた最初の小学校の最初の先生のひとりになったわけです。

ところが、力治は「手伝い教員」という身分で、正式の教員ではありませんでした。学問を修めた人なのに、漢学・儒教という古い時代の学問では、正教員と認めてもらえなかったのです。それでも、はじめての学校の名前が、自分の意見が通って森嶽学校となったのに、力治は満足していました。

そして、教育の仕事を自分の天職と考えていた力治は、給料も少ない手伝い教員を熱心につとめました。自分の寺子屋を学校に利用させてい

ながら、手伝い教員によるこんでいるように見えるカ治の姿に、村の人びとは改めて真の教育者としてカ治を尊敬しました。

今、五城目小学校の校長室に、白いひげをのばしたカ治の写真と大きな書の額が、かけられています。「五城目教育の父」として、カ治は昼も夜も五城目小学校にいるように見えます。

カ治は、明治8年から五城目付近を治める第11小区の区長、11年から富津内方面の戸長こちょうを、県に命じられてつとめました。15年（1882）の五十目小学校と校名が変わった年に、ふたたび手伝い教員になっています。明治19年におすこの順松が先生になると、カ治は小学校の先生を止めて隠居いんきよの身になりました。



五城目小学校にあるカ治の書

その晩年

隠居はしても、カ治に教えを願いに来る人は少なくありませんでした。そこで、新町の川岸近い所に小さな家を建て、漢学塾をはじめました。

塾では、漢詩や俳句も教え、たのまれるといくらでも書を書いてくれたといいます。長くのばしたあごひげの先の方を切って、自分で筆を作り、その筆で堂々とした文字を書いたそうです。

塾のある場所をもじって、「河岸庵白水清流居士こし」と自分を呼ぶという、変わったところもありました。書には「森嶽」や「白水」という号を署名しています。

明治34年（1901）に妻に先立たれたカ治は、42年（1909）12月5日、初雪の降った日に亡くなりました。76歳でした。

参考資料／『五小一世紀』（昭和49年 五城目小学校）



北 嶋 南 五

俳句をひろめる

築地町児童館の近くに、ブロックのへいでまわりを囲った土地があります。ここは、北嶋家の別荘のあったところです。別荘は「春及庵」といい、北嶋南五はここで俳句の活動をつづけました。今は南五の句碑などが建っています。

北 嶋 家

北嶋^う郊一郎が生まれたのは、明治12年（1879）3月12日です。江戸時代がおわり、文明開化の新しい時代になって、10年あまりしかたっていないころです。世の中は、東北のかたいなかでも、はげしく動きはじめていました。

郊一郎という名前は、^{うとし}卯年に生まれた長男という意味です。南五は、のちになって自分でつけた俳号です。

郊一郎の生まれた年の夏、秋田県内にはコレラという悪い病気がはやり、大へんな勢いで村むらにひろがりました。ばたばたと人が死に、五十目村（今の五城目町本町）では、死者をほうむるのが間にあわないくらいでした。父の孫吉は、若い村役人でしたが、はやり病いを防ぐために少しのひまもおしんで走りまわりました。

その後、孫吉は戸長（村長と同じ役目）になり、明治24年（1891）から28年までは五十目村の二代目の村長、村が五城目町になった29年（1896）からは、初代の町長になりました。また、県議会議員もつとめています。

村長になった次の年、孫吉はコレラでなくなったたくさんの村人をとむらうために、碑を^{こうしょうじ}高性寺の境内に建てました。

古い家がらの北嶋家に生まれ、村の人びとにしたわれ、村のためにつくす父の姿を見ながら、郊一郎は元気に育ちました。



北 嶋 家 (今町)

俳句との出会い

明治19年、卯一郎は五十目小学校に入学しました。2年にすすんだ20年4月から五十目尋常小学校に校名が変わり、4年で卒業になりました。

小学校を卒業してから、卯一郎は八橋農学校に入学したといわれています。この学校は、明治26年（1893）に設けられた県立秋田中学校農業専修科と思われます。学校は、寺内村八橋（今の秋田市八橋）にあったので、八橋農学校とよばれ、のちに県立大曲農学校（今の大曲農業高校）になります。

卯一郎は、新しく設けられた学校の最初の生徒のひとりになったと思われます。農学校を卒業した卯一郎は、東京に出て東京法学院（今の法政大学）にすすみました。その当時は、小学校よりも上の学校にすすむことは、大へんめずらしいことでしたから、さらに東京の学校で学ぶなど村の人びとには考えられないようなことでした。

卯一郎が東京で学生生活を送ったころは、日本の文学が西洋の考え方を取り入れて、新しい文学に変わっていく時期でした。新しい波は、小説だけでなく、わが国の独特な文学である和歌や俳句にも及んで来ていました。

新しい和歌・俳句をと、呼びかけたのはまだ若い正岡^{まさおかしき}子規でした。明治28年（1895）には、子規の俳句グループは「日本派」とよばれる大きな勢力になり、30年には俳句雑誌『ホトトギス』が出されます。



碧梧桐が来たときの横手の句会（立っている列の右から5人目が南五）

卯一郎が東京に出たのは、28年、16歳のときですから、日本派が生まれた年に当ります。

子規と卯一郎の年齢は12違いますが、日本派で注目されていた石井露月、河東碧梧桐は6つ年上で兄のように見えました。露月は秋田県出身でしたから、知らない人ばかりの東京ではたよりになる人でした。

医学を学ぶ露月から、法律の学校に通う卯一郎は、俳句を教えられました。五城目は江戸時代から俳句がさかんなところで、村役人は誰でも俳句をたしなみましたから、卯一郎も前から興味を持っていたのです。

露月につれられて、日本派の句会に出ているうちに、碧梧桐とも仲よくなりました。若い人の多い日本派の中で卯一郎は、最もとし若い方でした。

子規のあとをつぐだろろうと思われていた露月の弟分のように見られた卯一郎は、仲間から俳人として認められるようになっていきました。

焼 芋 会

卯一郎の東京での生活は、3年でおわります。北嶋家の長男として、学校を卒業すると五城目へ帰り、地主としての家の仕事や家業の鑄物工場の仕事をしなければならなかったからです。

明治32年（1899）3月、帰郷した卯一郎は、5月に19歳で結婚しました。一人前の東京の学校を出た男として、町の人びとから期待の目で見られるようになりました。

仕事の経験をつみながら、卯一郎は俳句の勉強をつづけました。『ホトトギス』を東京から取り寄せ、新しい俳句の動きにも目をこらしていました。明治32年には露月も郷里の戸米川村（今の河内郡雄和町）に帰りましたので、卯一郎は露月を師として、本気で句作の活動をしようと思いました。そして、南秋田郡五城目町の地名から南五という俳名を名のりました。

師の露月は、五城目町から遠い不便なところにおいて、いつも先生に会って教えてもらうわけにはいきません。そこで、鶴川村（今の山本郡山本町）の佐々木北涯からも先生になってもらいました。鶴川は、一日で往

復できる距離です。北涯は、村長や県議会議員をつとめるという人でしたから、のちに南五が政治にかかわるようになって、その点でも教えるを受けることができました。

露月が代表になり、能代の島田五工（のち五空）、北涯が協力して、33年（1900）『俳星』を発行しました。俳星は東北地方の代表的俳句雑誌といわれ、今も最も古い雑誌として毎月全国の俳人から句が寄せられて発行をつづけています。この雑誌に、南五がまっ先に参加したのはいうまでもありません。

南五は、ホトトギスや俳星でたくさんの句にふれ、俳句についての子規の文章を読んで、自分の作品の欠点に気づきました。そこで、ひとりでなく町の仲間たちと勉強するのがよいと考えました。

俳句の会「やきいも焼芋会」が、25歳の南五を中心にしてはじまったのは37年秋のことです。北嶋家の別荘で、焼芋会は毎月句会を開きました。

春 及 庵

河東碧梧桐が東北地方一周の旅に出発したのは、39年（1906）8月でした。ゆっくりと各地をめぐり、北涯のところから迎えの南五たちにつれられて、五城目町にやって来たのは40年7月15日でした。

句会を開いて教えたり、三倉鼻に遊んだりして、碧梧桐は18日朝、舟で八郎瀉を渡って男鹿へ向いました。この間、南五は碧梧桐を世話してたくさんのことを学びとりました。このときから、南五は俳句に自信をもてるようになり、県内の俳人たちは「五城目に南五あり」というよ



春乃庵のあったところ（築地町）

うになりました。

42年(1909)5月3日、露月と五空が南五を訪れました。このときも、町の俳人たちが別荘に集まり句会を開きました。

碧梧桐は森山が軒さきに見える別荘が気に入って南五庵とよんでいました。それから、みんな南五庵とよいうようになっていましたが、「ここは、北に森山があり、南からは光と風が入って来る。春が早く来る場所だ春及庵の額をかかげたらよい。やがて県内の俳人が、ここをたずねるようになるだろう。」

と、露月がいった、その日から春及庵と名づけられました。

春及庵は、俳人南五の活動のよりどころとなり、いよいよすぐれた作品が発表されるようになりました。

じゃりほり たきび
砂利掘の川原焚火や二月風
よもぎつ おやこ ひばりあが
蓬摘む母子に雲雀揚りけり
杉植えて動く人ありうららかに
もや たうえがさ
森山は霧の中なり田植笠
さぎ
森山の肩を鷺飛ぶ青田かな
あかどんぼ
稲上げの今日も親子や赤蜻蛉



『南五句集』

南五の句は、季節の風景だけでなく、その中で働いている人間がよまれています。露月がいったように、県内の俳人はぞくぞくと春及庵をたずねて南五の教えをうけるようになりました。

町長になる

南五が36歳の明治44年(1915)秋、父が亡くなって家を継ぎました。北嶋家の主人になると、町のいろいろな公職につかなければならなくなります。そうしたしきたりから逃れるわけにはいきません。

明治44年春に町の農会長になったのをはじめとして、6年から昭和8年まで町議会議員、7年から11年(1922)まで町の名誉助役になっ

ています。これでは、なかなか句作をするゆとりがありません。町の人びとからたくさん俳人が育った焼芋会を開くことも、むずかしくなっていました。しかし、すこしでもひまがあると、南五は手帳に句を書きつけていたそうです。

昭和5年（1930）4月51歳で、南五はみんなに推されて第11代の町長になりました。このころは、わが国だけでなく世界的に大変な不景気で、そのしわ寄せで東北地方の農村はひどいありさまでした。南五は町長として町の産業や経済を立て直すために、全力で立ち向いました。南五は、次のような句を残しています。

酒なくて百姓淋し芋の秋
芋も瘠せて百姓のこの衰へや

14年（1939）5月まで、9年間町長をつとめました。12年には中国との間に戦争がはじまりました。毎日のように出征して行く兵士を、町長の南五は五城目駅に見送りました。そして、戦地の兵士ひとりひとりに、家族のようす町のようすを手紙に書いてはげましています。

日中戦争、太平洋戦争とつづいた戦争中は、句会を開けるような状態ではありませんでした。昭和20年（1945）8月に戦争がおわり、待っていた平和な時代になると、南五は自分の家で盛んに句会をしました。

町内の小さな俳句の集まりにも、よろこんで出かけて指導しました。かつてのように、町には俳句を趣味にする人が多くなりました。

24年5月、南五は突然病気で倒れて、病床から離れることができず、26年（1951）4月2日70歳で死去しました。この病床の2年間にも実に多くの句を残しています。

春及庵の跡には、南五の句碑と露月・碧梧桐の句碑が並んで立っています。



南五の句碑（春乃庵のあと）

参考資料／『南五句集』（昭和30年）



館岡栗山

郷土の風景や行事を絵に

絵馬をかく

「豊治、おらさ、べらぼうかいてけれ。」

「うん。」

豊治は紙をひろげ、絵筆をにぎりました。きょうは、なん枚もたこ絵を仕上げましたが、たこ絵ではいいかせぎにはなりません。

そう思っていたところへ、

「^{えま}絵馬かいてける豊治という人、あだだすか。」

といって、男が近づいて来ました。うなずいた豊治へ、男はとなり村からやって来たといひます。

「なんとか、すぐかいてもらいたいす。板は持って来たす。」

「どんな馬こ、かけばえすか。」

客の注文通りに、豊治はこれまでたくさんの絵馬を描いています。男もうわさを聞いて、たのみに来たのでしょう。絵馬はかい馬のために神様に納めるものですから、お礼がもらえるのです。たこ絵をかくより、ずっといいかせぎになります。えのぐも筆も買いたいと思っていたので、豊治は、一生けん命にかきました。

絵かきになりたい

これは、日本画家^{りっざん}館岡栗山の10歳ころの話です。小さいときから絵のうまかった栗山は、友だちのたこ絵だけでなく、村の人びとからたのまれて絵馬を描いたりして、かせいでいたといひます。そのころから、栗山は絵かきになりたいと思っていました。絵をかくことが、本当に好きだったのです。

館岡豊治は、明治30年(1897)9月5日、馬川村高崎に生まれました。おじいさんが村長をつとめるほどの家がらでしたが、栗山が生まれたころは、豊かなくらしぶりとはいえない状態になっていました。

小学校を出て、明治44年に秋田師範学校講習科に入学し、15歳で五城目小学校の代用教員になりました。このまま学校につとめていたら、栗山は「絵の上手な先生」などといわれて一生をおわったかも知れませ



栗山の家があった高崎坊村

ん。しかし、「おれには、学校の先生はむかない。自由に好きな絵をかきたい。」とあって、1年ばかりで先生をやめてしまったのです。

それから、^{ししょう}師匠にもつかず、ひとりで絵の勉強にはげみました。けれども、独学では上達するのは困難です。

「東京さ、行かせてくれ。おれ、なんとしても絵かきになりたいす。」

「気でもくるったのか。絵かきになるなんて夢みたいなことばかりいって……。家を継いで、田さ出てまじめに働け。」

両親は、栗山のねがいを少しも聞こうとしません。

そんな家への不満から、町の落合病院の事務員になりました。ひまがあると画帳をふところから出して、季節の草花や花に寄って来る虫のようすを、ていねいにスケッチしている栗山を、落合医師はじっと見ていました。

あるとき、落合さんがいいました。

「館岡くん、絵かきになりたいのかね。それとも^{しゅみ}趣味で絵をかいているのかね。」

「先生、わたしは絵が好きで、絵かきになりたいと思っています。」

「そう思っているのだったら、ちゃんと師匠について勉強しないとイケないよ。」

栗山は落合さんのことばに、うなだれてしまいました。わかっていることですが、これまでどうにもならなかったからです。

「君は見こみがある。努力したら、画家になれるだろう。応援をしてあ

げるよ。』

落合さんのことばは、目の前に明るい道が開けてくるように、栗山の胸にひびいて来ました。

修業時代

栗山が家出でもするみたいにして、絵の修行しゅぎょうのために東京に出ていったのは、大正8年（1919）22歳のときです。弟子入りして絵の勉強するには、20歳ではおそいといわれていますが、栗山はかたい決心で上京したのです。

どんなにかたい決心も、病気にはかてません。半年ばかりで、帰らなければなりませんでした。でも、それにくじけず、郷里で健康を取りもどすと、栗山は25歳になっていましたが、ふたたび上京しました。

父は、決意のかたい栗山にあきらめて、止めようとはしませんでした

が、
「金は一文も送ってやれないからな。」
といました。

栗山は、下絵かきなどのアルバイトをして生活費をかせぎ、勉強にはげみました。

そのころ、長春という号を栗山と改めています。高崎から見える森山が、クリのような形だったからだ、号の由来について話しています。きびしい修業、苦しい生活の中で、心にはいつも生まれ故郷があったのでしょう。

一人前の画家になって、ふる里にしきに錦をかざる自分の姿を想像し、自らをはげますために、故郷の森山を表す栗山という号を決めたのかも知れません。のちに、栗山はふる里秋田を描く日本画家になります。

院展初入選

大正15年（1926）、絵の勉強を深めるために、栗山は京都に移りました。洋画の勉強なら東京ですが、日本画の修行は京都の方がいいと思っ



「犬っこ祭り」(昭和43年院展・たて151cm、よこ210cm)

たからです。京都での生活は、それまでよりずっと苦しくなりました。食うや食わずの日さえありました。

昭和3年(1928)、有名な近藤浩一路先生の画塾に入ることができました。栗山は、30歳になってはじめてりっぱな師匠についたのです。

師に恵まれた栗山は、その血の出るような努力のかいもあって、8年に「日本美術院」展(略して「院展」という)に初入選しました。その作品「台温泉」は、ひなびた山峡の湯治場の風景で、秋田に帰り時間をかけていねいなスケッチを重ねた上で、一枚の絵にまとめあげたものです。36歳になってはじめての入選でした。決して早い画壇への登場ではありません。

日本画家の場合は、院展に入選して絵かきの仲間とみとめられ、作品にも値段がつくようになりますが、絵が売れるわけではありません。栗山の苦しい生活はまだまだつづきます。

1回入選しただけでは、どうということはありません。連続入選すると、実力のある画家とされるのです。休むひまなく、栗山は新しい画題を決めて、次に出品する絵に取組みました。

横山大観賞にかがやく

夢中で絵をかく毎日を送っている栗山に、大へんな難問がつけつけられました。師匠の近藤先生が日本美術院をはなれるというのです。そう

なれば、弟子もいっしょにはなれるのが普通です。でも、栗山は院展の画家として、ようやく第一歩をふみ出したばかりです。

「苦しんで苦しんで考えたのですが、わたしは先生と行動を共にはできません。美術院に残ります。」

最初の志をつらぬいて、栗山は最後まで院展に出品しつづけました。

師匠を失った栗山は、血の出るような努力によって院展に連続入選をはたし、仲間たちをおどろかせました。そして昭和11年（1936）に、美術院研究会員となり、次の年の研究会展では「雨後」が横山大観賞となりました。それを機会に、安田鞞彦^{ゆきひこ}先生の教えを受けるようになりました。さらに、14年には院友となっています。栗山は、実力のある画家となったのです。

初入選以来、連続入選30回、43年（1968）には特待・無鑑査^{とくたい むかんさ}になりました。特待というのは、日本美術院院友の中でも、特別の待遇を受ける院友になったこと、無鑑査とは、これまで多く入選しているので院展に出品した作品は、鑑査しないで展示されることをいいます。

郷里を描く

戦争がおわる少し前の20年4月に、48歳の栗山は京都から五城目町に帰りました。よく年秋には、一日市町（今の八郎瀉町）に移りました。郷里に住んだ栗山は、秋田の風景と行事と伝承芸能を、描きつづけま



「番 楽」（昭和47年院展・たて126cm、よこ150cm）

す。わき目もふらず、秋田を日本画の筆で追いつづけ、たくさんのすばらしい作品を生み出しました。院展特待・無鑑査となったのも、連続入選だけでなく、郷里に住んで栗山でなければ出来ない絵の境地を見つけたからだともいえます。

栗山は、いつも五城目市をスケッチしていましたが、市の人びとを描いた作品がたくさんあります。番楽・盆踊り・なまはげ・竿灯などの行事や芸能、森山・八郎瀉・十和田湖などの風景が、栗山の絵の中で特に目を引く作品です。

絵のほかに力を入れたのは俳句でした。若い時に北嶋南五に教えられて俳句をはじめ、馬場目の俳人草皆五沼と句作にはげんだこともあり、俳句にそえる俳画にも筆をふるいました。雀館公園の高崎が見える広場に、栗山の句碑^ひがあります。

短歌も若いころに五城目の歌人中村徳也と学んだことがあり、短歌会をつくっています。

秋田県内の展覧会の審査員をつとめたり、県内の日本画家の会をつくって勉強しあったり、湖東部のニュースを集めて新聞を発行したり、栗山の活躍は絵筆だけではないひろがりを持っていました。

昭和53年10月16日、81歳で亡くなりましたが、病床^{びょうしょう}にあっても、「思いきり大きい、踊りの絵をかきたい。何百人の群衆が踊っている、大きな大きな^{びょうぶ}屏風絵をかいてみたい。」

といい、心は絵のことでいっぱいでした。



栗山句碑（雀館公園）

参考資料／『栗山画談』9（昭和55年 秋田文化社）



近 藤 泰 助

湖 東 病 院 の 生 み の 親

湖東総合病院は、五城目町付近・湖東地域のただ一つの総合病院として、人びとの医療・病気の予防・保健の仕事にとりくんでいます。人びとが、湖東総合病院をたよりにしていることは、1日の外来かん者が660人という数字に、はっきりとあらわれています。入院用ベッド数は231ですが、いつも入院かん者でふさがっています。

この病院には、内科・小児科・外科など13の科があります。13名の医師、110名の看護婦など、全部で約240名の人びとが働いています。また、全身用X線コンピュータ断層撮影装置や電子走査超音波診断装置など、最新式の設備がととのえられています。

こんなに、みんなからたよりにされ、利用されている病院ですが、昭和8年（1933）に五城目町や付近の町村の人びとがお金を出し合ってつくった病院だということを、知っている人はあまりいないようです。病院の必要を人びとに説き、その計画をたて、みんなの中心となって働き、それを実現させたのは近藤泰助でした。

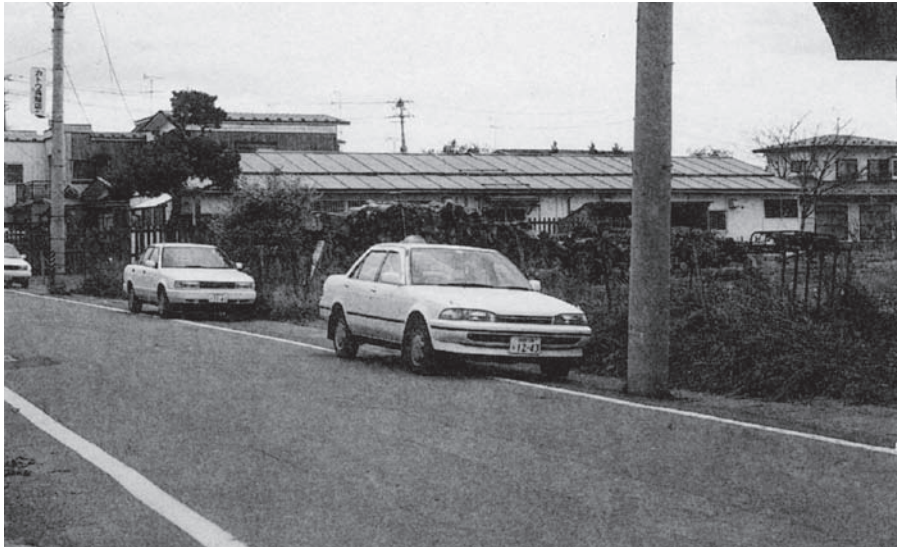
農民のくるしさ

昭和のはじめころは、世界的な不景気で日本の産業は輸出がふるわず、経済は冷え切っていました。不景気のしわよせは、農村に特にひどく、東北地方では米の不作が加わって、農民は生活にくるしんでいました。

近藤泰助の家は、五城目町でむかしからの持ちといわれた家で、町



新町にあった病院



近藤家と病院のあったところ（新町）

やまわりの村むらにたくさんの土地を持っていました。近藤家は、その土地を農民にかして米をつくらせていました。

土地の所有者を地主といい、土地を地主から借りて米などを作っている農民を小作人・小作農といいます。小作人は、土地を借りているのですから、小作料という借り賃を、収かくした米の中から地主に毎年おさめます。

泰助は、若い時に地主の家をついでいました。

小作をしている農民は、借りた田んぼを耕して米づくりをしているほどですから、もともとお金持ちではありません。そのころの農民は自分の田んぼを耕している自作農は、たいへん少なく、ほとんどは小作農か自小作農でした。

まずしい小作農の人びとのことですから、土地の借り賃である小作料をおさめるのは、並なみたいいてではありません。小作料をおさめられない小作農が、不景気になるとますます多くなっていました。

泰助は、小作料の集まりがよくないのに困っていました。地主の生活は、小作料にたよっているのですから、集まりが悪いと生活にひびいて来ます。

小作をしている農民にたずねてみると、

「家のばばが長わずらいしていたところに、わらしが病気にかかったものだから、なんともならない。」

と、おさめられなくなった理由をいいます。

「ばばもわらしも、働き手でないから、田畑の仕事には関係ないはずだ。それは、おさめられない理由にならないだろう。」

と、泰助はしかりつけようとしました。

「だんなさん、そうではないです。家の者が医者にかかるような病気になると、医者に払うお金で家族みんな食べるものも食べられないようになって、小作料もおさめられなくなってしまう。」

あい手のことばに、泰助は思わずうなってしまいました。ゆとりの少ない農民の生活のくるしさに、気がついたからです。

そういわれてから注意して見ると、病気しても医者にみてもらえないでいる人が、農村にも町にも多いことがわかりました。高い医療費いりょうひが払えないからです。ですから、がまんして医者にいかないでいるうちに、病状がすすんでしまう例が多かったのです。医者の払いのために、生活できなくなる人も少なくありませんでした。

「国民健康保険」などに、国民全体が入っていて、少ない負担ふたんで医療が受けられる今からは考えられないことです。

産業組合

お金がなくて医者にいけないという人びとのことが、泰助の心からはなれなくなってしまいました。そういう人は、農民だけでなく、町の働く人びとにもたくさんいます。どんなに心をいためても、泰助ひとりの力では救ってやることはできません。

ちょうどそのころ、泰助のいとこの畠山松治郎が、矢場崎に住んでいました。畠山は、少し前まで農民組合のリーダーとして活躍していたので、いいちえを持っているかも知れないと泰助は考えました。

泰助の話聞いた畠山は、

「あなたが、今やっている事業を医療にもやってみたらどうだろう。」と、こたえました。

「今やっているというのは、農業倉庫のことかね。」

「そうだ。それと同じやり方で、病院をつくったらどうだろう。」

米を保管する農業倉庫と、病人を診察し治療する病院とは、なかなか

泰助の考えの中でむすびつきませんでした。

保管がうまくないため、米の品質が落ちて安く買ったたかれるのを防ぐために、町や付近の村むらの米を保管する農業倉庫を建てていました。その巨大な倉庫の建設は、泰助が中心となってすすめていたのです。

五城目駅に接して建てられる倉庫は、地主や自作農251名で五城目販売購買利用組合はんばいこうばいを組織し、その組合の倉庫として建設していました。

「そうすると、組合をつくって、みんなのお金を集め、それを資金にしてすすめるのだね。」

「そうだ。医療組合を組織するんだよ。」

「医療組合も産業組合になるのか。」

「そうだよ。りっぱな産業組合だ。安い料金で病人をみてやるんだ。」

畠山の話では、県内では二か所で医療組合病院の計画がすすんでいるというのです。

農業倉庫を建てている販売購買組合や、自分たちの病院をつくる医療組合は、産業組合法という国の法律にもとづいて、組合員を募りつ資金を出し合って組織する組合でした。不景気で困っている農村で、昭和のはじめころさかんにつくられています。この組合は、太平洋戦争後は協同組合に移りました。

最初、病院と産業組合とむすびつかなかった泰助でしたが、倉庫を建てる仕事をしているので理解は簡単でした。そして、どうにかして安い料金のみんなの病院をつくろうと、心に決めたのです。



農 業 倉 庫

医療組合をつくる

昭和6年(1931)11月、五か町村(五城目町・馬場目村・馬川村・富津内村・内川村)連合の農業倉庫の第1号が完成、組合が開業しました。泰助はその専務理事となって、組合の仕事すすめる責任を負うことになりました。後には組合長もつとめています。

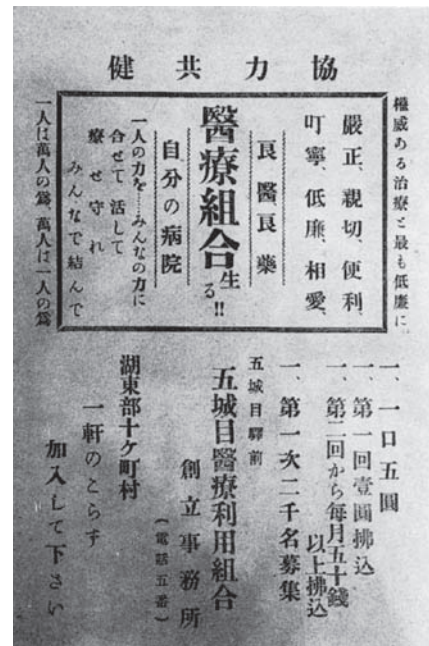
昭和7年になると、泰助は畠山とともに医療組合の計画をこまかにたてました。計画の説明を泰助から聞いて、最初に賛成してくれたのは五城目町長の北嶋卯一郎でした。また、はじめから専門家として、相談にのったのは町で薬店を開いていた今村久蔵でした。

湖東部の医者の中には、かん者が病院にとられるとって反対する人もいました。しかし、五城目町が助役の鈴木喜太郎^{ほつきにん}を^{ほつきにん}発起人に出して協力してくれたので、医療組合を組織する準備の仕事は、予想していたより早くすすみました。

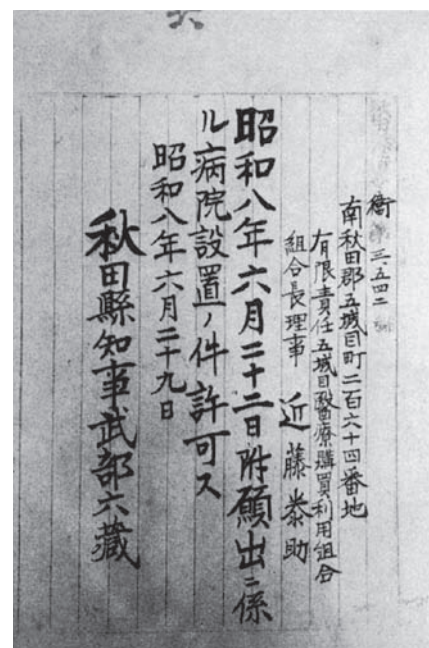
7年の秋には、組合の範囲とする五城目町・一日市町・面瀉村・大川村・馬川村・馬場目村・富津内村・内川村の家々に広告のチラシがくばられました。全部の戸数3,910戸、人口は22,814名の中、組合員となって資金を出したいと申しこんだ人は、2,558名にのぼりました。

加入申し込みは、それぞれの家の主人に当る人たちですから、6割をこえる家が組合員になったのです。どんなに地域の人びとが、安い料金の病院を待っていたかと思うと、泰助は一日も早く病院をつくらなければならないと、ふるい立つような気持ちになりました。

秋田県知事から「五城目医療購買利用組合」



組合に参加をよびかけるチラシ



病院の許可書

の設立が許可されたのは、昭和8年5月15日、7月1日にはさっそく開院して診療しんりょうをはじめています。泰助の熱意が伝わって来るような気がします。

家を病院に

医療組合病院にしたのは、廃業した新町にある医院の建物で、その向いの大きな家を借りて入院用の病室にしました。4名の医師や9名の看護婦などで仕事をはじめたのです。

新しい病院ができるまでの3か月間に、この仮りの病院にやって来たかん者はのべ10,900名になり、たいへんないそがしさでした。

新しい病院は、組合の少ない資金では土地を買って建てるわけにはいきません。建物も全部新築することは無理でした。組合長になった泰助は、新町の自分の家と土地の半分を組合に使ってもらうことにしました。

病院は、泰助の住んでいる家の半分をいろいろな部屋に仕切り、足りないところを別につけたして建てましし、仮りの病院から移りました。湖東部の町や村から、かん者は毎日病院におしかけて来ます。昭和10年度のかん者数はのべ16,000名になりました。

昭和12年1月からは、病院の名前を湖東病院と改め、15年6月には組合を湖東医療購買利用組合連合会に組織を改め、泰助はその会長になりました。ところが、その年の8月28日、病院は火事で全部焼けてし



現在の病院

まいりました。病院といっしょの泰助の家も、あとかたもなく焼け落ちてしまいました。

泰助には悲しんでいるいとまはありません。泰助は責任者として、一日も早くかん者のために病院を再建しなければなりません。

安い料金で医療を行っている組合ですから、黒字ではあっても病院を建てるお金はありません。それに、この機会に近代的設備の病院にしようという計画も持ちあがりました。

「大きな病院を建てよう。私の土地を全部、病院に使ってもらうよ。」

最初から病院事務長として、泰助を助けてきた畠山がおどろきました。

「それでは、会長の家はどうするのですか。住む所がなくなります。」

「私のことは心配無用だ。焼け残った土蔵に住むことにするよ。それから、資金の不足分は、私の責任で借りてでも都合しよう。」

泰助がこうした決心をし、それを実行したのは、セツ夫人が、

「社会のためにはじめたのですから、どんなことがあっても、つづけるのが本当だと思います。」

と、はげましたからでした。

新しい病院は、1年後に完成しましたが、住む土地も家も失い土蔵住まいの近藤家は、その後金足村小泉瀧向（今の秋田市金足）に家を建てて17年10月に移りました。

湖東病院は、昭和23年8月15日から今の秋田県厚生農業協同組合連合会の病院となりました。泰助は26年10月30日まで、病院を取りしきっていく^{しゅかん}主管をつとめました。

病院は43年8月に、五城目町と八郎瀧町の境のところに新町から移転し、今は湖東総合病院という名前になっています。

町の発展につくす

泰助は明治26年（1893）3月16日、近藤家の長男として生まれましたが、若いときから町の発展について、はっきりした意見を持って行動しています。

五城目町は鉄道の通らない町になっていましたが、大正11年（1922）

軌道線^{きどう}で奥羽本線に連絡するようになりました。この計画から軌道が走るまで、28歳の泰助は社長になった渡辺全之助を助けて、非常な努力をしています。そして、五城目軌道株式会社（今の秋田中央交通）ができると、専務となって会社を発展させました。

販売購買利用組合・農業倉庫は泰助の提案と努力によるものですが、米の出荷に便利なように、駅の隣りに倉庫を建て貨物ホームをつくったのも、泰助の考えでした。

この組合は、今は五城目農業協同組合になっています。

町の商店や工場などのための、銀行のような金融機関^{きんゆうきかん}として五城目信用組合（今の信用金庫）が発足したのは、昭和3年（1928）のことですが、これにも泰助は力を注いでいます。

そのほか、泰助は町議会議員や町の助役もつとめ、町のためにつくしました。

亡くなったのは昭和37年（1962）4月18日、69歳でした。

参考資料／『秋田県医療組合運動史料』（昭和54年 秋田県厚生農業協同組合連合会）

執 筆 者／元五城目町立内川小学校長
小 野 一 二

目次イラスト／成 田 哲 也

五城目町のほこり

すばらしい先輩たち 2

平成5年1月31日発行

編集発行／五城目町教育委員会

〒018-1723

秋田県南秋田郡五城目町上樋口字堂社75

印 刷／湖東印刷所

〒018-1724

秋田県南秋田郡五城目町字下夕町13-5